

シリーズ1、病虫害等による庭木の被害とその対策 (13) —カナメモチごま色斑点病—

日本樹木医会富山県支部
樹木医 西村 正史

生垣としてよく使用されているカナメモチ (写真-1) やレッドロビンの葉に斑点がたくさんでき、葉が落下して葉の量が少なくなったが、原因は何ですかという問い合わせが多く寄せられています。これは、カナメモチごま色斑点病という病気です。

1. 病気の特徴

本病は、カナメモチやレッドロビンの他、シャリンバイ、カリン、ビワ等のバラ科ナシ亜科 11 属 15 種の樹木類に寄生します。

4月下旬頃から当年葉に発生します(写真-2)。葉に紅色の斑点が多数生じ、発達して5mm程度の灰褐色～黒褐色の円形の病斑となります。やがて病斑周辺は鮮紅色に変わり、病斑中央部に黒色で光沢のある分生子層が生じます。これは後に亀裂を生じ、白色粘塊(分生子塊)が放出されます。被害を受けた葉は落葉し、2度吹き、3度吹きした葉も次々感染して落葉し、しだいに樹勢は弱まります。成育環境が悪い場合は、枯れることもあります。

2. 防ぎ方

被害を受けた葉は伝染源になりますので、落下した被害葉を集めるとともに枝に着いている被害葉も摘み取って、焼却してください。そうすることによって、被害の拡大を防ぐことができます。

樹木類を対象にした登録農薬としては、ベンレート水和剤(普通物で魚毒性はB類)とトップジンM水和剤(普通物で魚毒性はA類)の2つがあります。前者は2000倍液を、後者は1000倍液を発生初期に散布します。

カナメモチを対象にした登録農薬としては、花セラピー100(普通物で魚毒性はC類)と花セラピー(普通物で魚毒性はC類)が登録されています。前者は100倍液を散布します。後者はスプレー式の容器に入っているのので、原液をそのまま散布することになります。いずれも発生初期に散布します。

3. カナメモチとレッドロビンの特長

カナメモチは、日本の比較的暖かい地域に分布する常緑性の小高木です。刈り込んでもすぐに芽を吹き、小枝を密に出して茂り、新葉の色が紅く美しいので、生垣として利用されています。

レッドロビンは、カナメモチとオオカナメモチの交雑種で、新芽がカナメモチよりも鮮やかな紅色になるので、最近ではカナメモチよりもレッドロビンの方が多く植栽されています。



写真-1 カナメモチの生垣



写真-2 被害を受けた葉の表